

325  
330



始





3F 89

325-330



宮川比鄰著

基督教の三徳







はしがき

何時晴るべしとも豫測し難かりし世界の戦雲は漸く一掃さるゝに至り、平和の曙光を認めて、今年のクリスマスを迎へることは、何人も特に深い感謝を禁じ得ない處であります。私は今春來少しく健康を害し、引籠つて居りましたものゝ、昨今漸く回復の期に向ひ、世界の人々と共に、この感激深きクリスマスを祝ふことを、殊更らに喜ばしく思ひます。此處にクリスマスに當り、例の如く恩師宮川牧師の説教を仰いでこの小冊子を編み、私の新生第八年を記念して、廣く諸兄弟に相頒つ次第であります。願はくは神ご人ごに對するわが感謝の掬まれんことを。

大正七年クリスマス

東京の寓居にて  
廣岡淺子



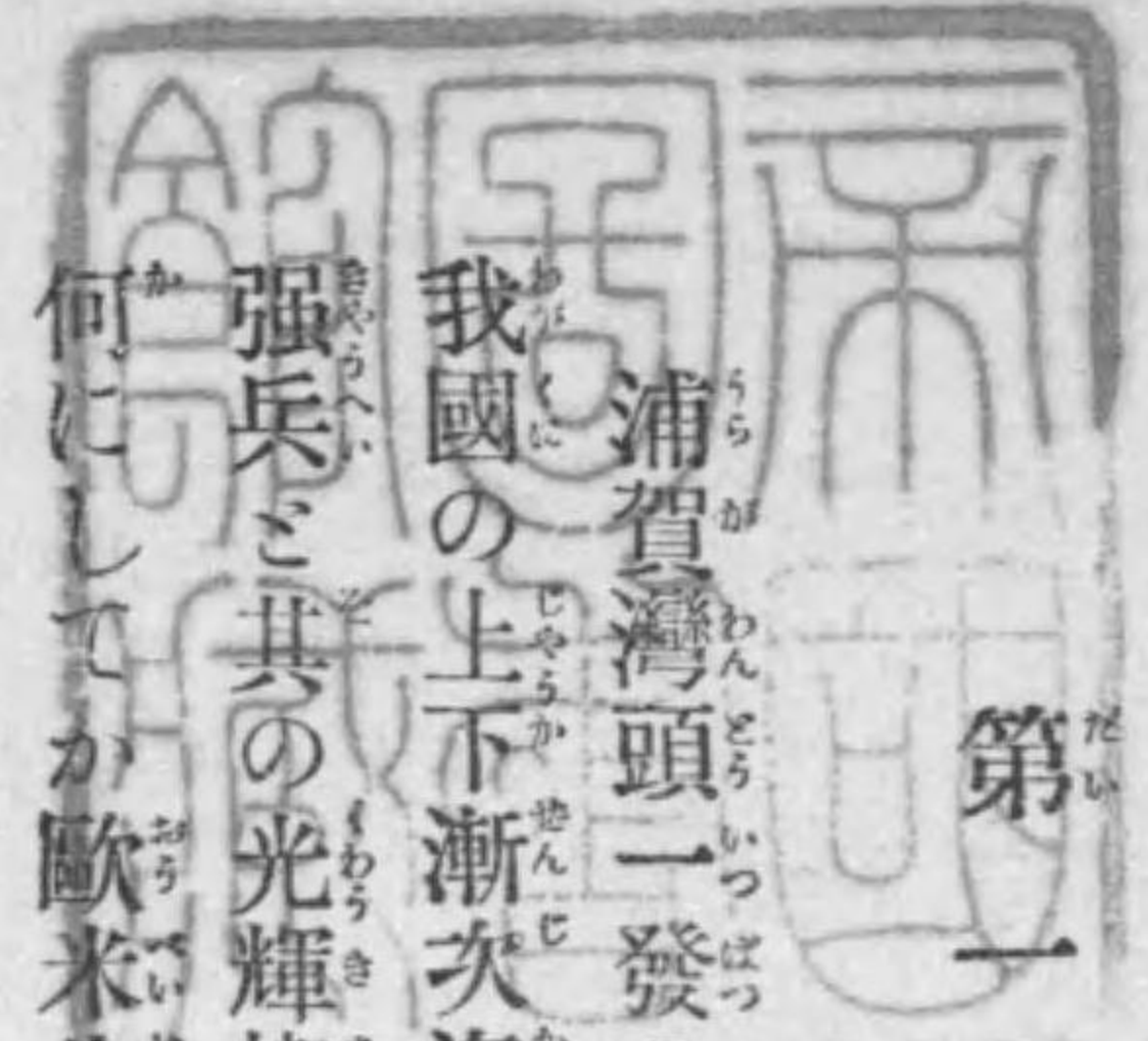
目次

第一章	信の作興	一頁
第二章	希望ある人生	一八
第三章	愛の充實	三〇
第四章	最高の模範	四二



# 基督教の三徳

## 第一章 信の作興



浦賀灣頭一發の砲聲に徳川三百年の封建鎖國の夢破られてより、我國の上下漸次海外の事情に通ずるに至り、殊に歐米列強の富國強兵と其の光輝燦爛たる物質的文明の繁榮を見て、我國をして如何にしてか歐米先進國の班に列せしめんを希望するの餘り、先づ其の科學的文化を吸取するにこれ日も尙ほ足らざるものがあつた。明治維新の業成りて國民教育の根本方針を定むるに方り政府當局者は忠君愛國に加ふるに科學萬能主義を標榜して、以て明治の子



弟を教養する所があつた。其後約半百年の今日に至るも其の根本義に至つては何等の進歩もなければ發展も見ない様である。其處で科學萬能主義教育の下に訓陶せられた明治以來今日の國民は其の精神的方面に於て一大缺陷の存するところは掩ふべからざるやうになつて來た。即ち明治大正を通じて此の主義の下に教育せられた我國の子弟にして今日の社會に活躍せるものゝ多くは其の人格品性の上に於て餘りに香ばしくないといふ結果を見るに至つた。近數年政府當路者も大に悟る所があつたと思へて、何かにつけて「信」の一字を振り廻すやうである。けれどもそれも何處か保守的氣分に引つ懸つて居るやうに見えて、決して徹底的なものではない。それは兎も角も、去る十月卅日首相官邸に於て開かれたる

「教育調査會」の席上に平沼麒一郎氏の提出されたる「人心の歸嚮統一に關する建議案」なるもの、筆頭には「敬神崇祖の念を普及せしむる方法を講ずる事」なる一項がある。この項によつて示されたる一事は我國の國民教育上精神的方面に於て一大缺陷の存するここを物語るものではあるまいか。遅れたり雖、又不徹底なり。雖、此の一事に當局者が氣付いたのは我國將來の國民教育のためには喜ぶべきことである。さりながら、此の建議案なるもの、形式なり精神といふものは如何にも古臭く保守的な頭の國民に歡迎せられるやうなものではあるまいか。

數年前に現内閣總理大臣原敬氏が内相で、現内務大臣床次竹次郎氏が其の次官であつた際に、内務省の發案で三教合同なるもの



が開かれたことがあつた。これは當時の政府當路者が國民の指導及其の精神教育に關して宗教政策を施さうといふ心算であつたかも知れないが、その會合も龍頭蛇尾に終つたかの如き感じもして居る。然し此の頃から政府當局殊に文教の任にある爲政者は、少くとも國民道德の振作といふ點から見て宗教の不可缺なることに感附いて來て居ることは蔽ふべからざる事實である。

元來、宗教は深く世界人類の内性に固有して居るものであつて、如何なる種族の間に於ても殆ど信仰を有しない所のものはないのである。此處に面白いことは、地球上最も進歩した所謂世界の一等國民中の粹ともいへるべきものと未開なる原始時代に屬する種族との間には、形式こそ異なれ、宗教上信仰上の一致を見出す事

である。即ち世界の最高文化に浴しつゝある民族の精神状態は何等文化の彫琢を受けないウブな原始種族の夫れと同じことである。然しながら、半開半化の民族の間には宗教精神の寂滅して居ることを見るのであるから、如何に人類が科學思想や、哲學まがひの宗教や、祖先崇拜などいふ宗教まがひな習俗の爲に苦められて眞實なる宗教生活と縁遠くなつて居るかといふことも知られるのである。及ばずながら、予輩の觀測する所では我が國民は一般に世界の中開民族の禍せられて居る精神状態と同じ無信無靈魂を主張する所のものであるまいかと思はれる。これが實例を擧げるならば殆ど枚擧に遑ない程であるが、今茲に贅しない。それは兎も角も、前述の如くに「信」の一字は古往今來人類を一貫して居る所



のものである。

「信」の一事については太古エジプトの歴史に之を見るも、亦西部亞細亞地方のセミツク族に徴するも、亦印度支那等太古の歴史によるも、將た又未開野蠻の民族の狀態を調べて見るも、之が一貫して居ることを認むる次第である。尙ほ之を古來の學者哲人の間に求むるも且つ然りである。此の事について、近世哲學の指導者であり又組織者であるカントによること、彼は其の純理批判の方面では神はわからないとしてあるが、實踐批判論に入つて、信仰が人生の根柢であることを叫んで、神と永生と人の自由とは動かすべからざる三大眞理であること喝破して居る。而して此の神は如何なる理によりてわかるかといふこと、彼れは直覺することによ

るといふのである。此の直覺たるや實に人間の宗教性を開發する所の根本的要素である。宗教なく信仰なきものは此の人心最奥の機能である直覺力を喪失して居るといふことが出来ると思ふ。人の天性は信じなくては居られないのが常である。こは其人に宗教的の直覺力が尙ほ働いて居ることを教ゆるものである。けれども哲學者といひ科學者といふものゝ内には種々なる道理を結び合はして神の存在を否定したり、わからないといふものがある。然しごとくいつても人間の宗教的の直覺力を否定することは出来ないから、此の直覺力即ち天性信ぜんとする直覺力の目的である神の存在を否定することは出来ないことになる。古人のいつたやうに、上行く水は異なれども下行く水の流は同じことで、人間の宗教



上信仰上の問題でも矢張り其處がある。

今回の世界大動亂の前我國に於て持て囃された獨逸のオイケン教授の如きもやはり信仰の方面に立つて有神の必要を認めて居る人である。これも歸する所神は直覺するにあるといふ所に落附くやうに思はれる。最近心理學の研究が旺盛になつて來たのであるが、其方面の學者としては先づハーバード大學の故ゼームス教授を推すであらうが、同教授は「眞理は何ぞや」といふ著書や「宗教的經驗の種々」といふ書物の中に於て、神を認識するといふことは實際的にすることであるといふ結論に達して居る。彼れの高弟にシレル・ヂウエーの如き人々があるが、其の立論の方法形式は異なるにしても、神を認識するといふことはゼームス教授の結論

に一致して居る。

更に科學者の方面を見るに、(我等は其方面の事には甚だ迂遠ではあるが)全體の傾向からいふならば矢張り哲學者や心理學者のいふ所と其の趣を異にしないやうである。彼の現代の碩學サー・オリバー・ロツヂ博士の如きは科學者として錚々たるものであるが、近年彼は大に心理の研究に熱心して更に此の方面から宗教上の信仰に深入りしつゝあるのである。大戦勃發以後暫しの間は或は基督教の信仰は此の大戦争と共に消滅しはしまいかといふ疑念を懷いた人々が少からずあつたやうである。然しながらそれは一片の杞憂であつて、予輩の豫て信じたる如く斷言せし如くに、基督教は此の大戦によつて益々其の光を放つやうになつたのである。



昨年五月の頃であつたと思ふが、英國の科學的小説家で無神論を以て有名なウエルズといふ人が「見えざる王者としての神」といふ著述をしたのであるが、此の人は戦争が初まるご間もなく白佛方面と伊太利方面の戦線を訪問して、其の信仰を起して新たな神について新たな説を主張し初めたのであるが、其の著書の中に彼が説く所の神は多少我等のいふ所の神の内容とは其の趣を異にするものはあるにしても、明かに神信心の人間不可缺のものであるといふことを叫んで居る。これによつて（獨一の神の思想によつて）人生及宇宙の問題は解決せらるべきであるといつて居る。要するにこれは「信」の一字がどうしても看過すべからざるものであるといふことをいひ表はした所のものである。これは啻にウ

エルズのみでなく、今日多くの先覺者が此の戦争によつて益々明かに主張し出した思想である。

其處で予輩は先の教育會の建議案の第一條に現はれた考へに歸つても、我國の思想界が其の色彩は異なるにしても世界の趨勢に乗じようとして居ることを見て喜ぶものである。「信」の一字はこれが人間本性固有であるとするならば、これによりて人生問題社會問題教育其他あらゆる諸問題の解決に信念の不可缺であることを知らなければならぬ。其處で予輩の問題としては、如何にして我國に於て此の信仰を進むるかといふことである。今少しくこれについて考へて見たい。

我國で一般に敬神といふ文字を用ふるのであるが、其の内容は



果して如何なるものであらうか。造化の神を崇敬するといふことは敬神の一方法であるが、之を我國の所謂造化の三神として禮拜せしむるが如き考へは大に注意を要することである。三神といはずして、天御中主神を造化の神として崇拜せしむるならば其の間に崇拜の理由を發見することが出来ると思ふ。然るに各府縣郡村等に散在してある縣社村社郷社といふ如きものを全部國民崇敬の標的とするといふことは其の間に多少理屈をいふ餘地のあることと思はれる。中に甚だしきものにあつては神體の不明又は神體の如何はしきものが少からずあるといふではないか。かくの如きものを崇拜せしめようとすることは今日世界の大勢に鑑みて洵に愚策といはなければならぬ。又これは國民を愚にした所のもの

である。尙ほ且つ之を以て我が國民の精神教育の一端に資せようとするが如きことは思もよらないことであるといはなければならぬ。從來小學校の校長や教師などが其の生徒を引率して神社に參拜することが尠からずあると聞いて居る。然し又聞く所によると少しく理を解した子供達は神社參拜を疑問にして居るといふことである。こんな状態であるならば我國の國民教育の精神的方面の開拓は全く出来てないといふことになるかも知れない。これは我が國民の將來のために洵に恐るべきことであると思ふ。然しながら我が皇祖皇宗に對しては日本國民として何處までも尊敬の念を拂はなければならぬといふことは申すまでもないことである。尙ほ英明の天子と其の皇徳とに對しては大なる記念の



標幟を遺すべきが國民としての義務である。それに加へて國家の運命を擔ひ、或は國家を指導して進歩發展せしめた所の國士に對してはこれ又特別なる記念をなさなければならぬ。記念するにいつて神にする必要はあるまいが、兎に角、文明的記念の設備をする必要がある。米國に於けるワシントンの記念碑の如き、英國に於けるネルソン提督の記念像の如き國民尊敬の中心たるべき文明的記念の標幟を建設せなくてはならない。かゝる記念の標幟は國民の精神教育の上に多大なる貢獻を齎し來るであらうと思ふ。世界の文化が進むにつれて信念の形式や宗教は之と共に開發され行くべきものであるが故に、國民の信念を養ひ之を指導せんとするの方法も精神も、共に保守的態度に在つてはならない。今日

世界の文明によつて破壊さるゝが如き宗教や其の形式などは最早捨つべきの時である。予輩は殊に此の大戦後の國民の信念涵養精神教育の問題については大に考ふる所あらねばならぬと思ふ。國民の思想が變つたといつては改め、世界の氣勢が改つたといつては改革しなければ役に立たないやうな信念涵養の方法であるならば初めから之を取らないに如くはない。吾人は寧ろ其の本に歸つて、考へる必要があると思ふ。

吾人は古來我が國民が信じ來つた八百萬の神々を信じて其の宗教性を今日満足せしむることが出來ようか、又先祖の崇拜を以て我が宗教を導いて行く事が出來るであらうか。これは明かな問題である。それは寧ろ過去の小天地に蟠居せる國民の信念涵養の方



法であつて、開國進取世界的大潮流に觸れて居る國民を指導する方法ではない。さらば何を以て我が國民敬神の念を作興すべきであるか。これが再び問題となるのである。予輩はいふ、我が國の國情は諸外國の夫れとは異なるものがあるから、多少敬神の念を養ふべき方法に於ては異なるものがあるが、然し今日の大勢からいふならば、ごうしても獨一の神、天地の主宰者にして、宇宙萬物の造物主たる神を國民崇拜の目的として行かなければならないと思ふ。蓋しこの思想は世界共通の宗教思想であつて千古萬古動きなき所の信念である。殊に基督教にあつては之を天父といひ又父なる神と稱して居る。我が國民は最早此處に着目すべき時が來たのである。この思想にまで進んで來るならば千古

萬古に變らざる國民敬神の思想を指導する方法に達したものである。いはなければならぬ。而して國民の精神教育も、亦此の大なる宇宙的思想の源流によつて指導せられ、其の指導を受くる子弟の中より大人格者を作り出すことが出來て、國民の前途に大なる祝福と光明とを認めることが出來ると思ふ。要するに予輩は我國民信念作興のためには以上の宗教思想によるの外はないと斷ずる結論に達して居るので、茲に自己本懷の想を開陳披瀝する次第である。



## 第二章 希望ある人生

人生は一日たりとも、希望なくしては立たれないかと思ふ。我國民の中には一寸した蹉跌からして河海に身投げをしたり、モルヒネを服して自殺したり、縊死したり其他様々な仕方て自殺する者があるが、其の多くは確に衷心に希望がないからであらう。個人のみならず、民族にしても満々たる希望があるならば進歩發達も速かた、世界有数の國民たる事が出来るが、之に反して全く希望なき境遇に陥れば、其の民族は遂に滅亡を免れない事になる。此の方面の實例を歴史の上に求めるならば數多あることであるが、今は茲處には贅しない事にする。

予輩の願は如何なる場合にも輝ける希望を有りたいといふにある。今茲に青年と老年とを比較しても一般に前者は幾多の希望に輝き、後者はおしなべて此の世に對する希望といふものは少いのである。其處でこの兩者の進歩發達に就て考へるに、其の間には宵壤の差あることを發見することである。尤も體力其他の能力に相違のあることは明かであるが、唯だ希望のあるなしといふことが此の場合には非常なる差異を生ずる元になるやうである。更に老大國民と若やげる新進の國民と比較しても同じく其處に徑庭あることは明白である。

米國の如きは此の後者に屬する方であらうが、過去百有餘年間の進歩といふものは實に世界を驚倒せしむるものがある。英佛の



如きは老大國民と稱せられてあつたので、獨逸人の目には此の二國は何時の日にか亡滅するであらうといふやうに見えたのである。それで彼が佛蘭西等に對する態度は全く亡國民に對する態度であつた。さればこそ、此の度の戦争のやうな不祥事が突發することになつた譯で、此の戦争も初め獨逸側では旬日を出ずして佛國の首府パリを陥れ、更にロンドンを突き、以て獨逸に光榮ある戦局を結ばうといふ計畫であつたのである。

然るに老大國視されて居た英佛兩國も愈々こなれば、其の國民性の若やぎ振り是非常なもので、到底、獨逸も及ばない所のものであつた。これは一面から見れば英佛などが戦争のお蔭で元氣を恢復したと見ることも出来るであらうが、他の一面から見る

ならば英佛側に於ては其處に國民の間に目で見ることの出来ない非常なる希望の光に満されてあつたからであるといふことが出来る。若しも英佛側に此の國民的希望がなかつたならば已に獨逸の見くびつたやうに亡國の民さならないことも限らない。けれども獨逸及自餘の中央同盟國をして土崩瓦解遂に聯合國に向つて和を乞はしむに至つたのは、蓋し英佛を首腦とする聯合協商國に一般に大なる希望の生命が輝き出でたからであるといふことが出来る。

諸、新約聖書を披いて見るに、基督の後を承け繼いで歐亞兩洲の大傳道を負擔して起つた所の使徒パウロは、羅馬書五章の三節に「第これ耳ならず患難にも欣喜をなせり、蓋は患難は忍耐を生じ、忍耐は練達を生じ、練達は希望を生じ、希望は羞を來らせ



ざるを知る」

ご記されてある。予輩は之を逆に讀んで見れば其處に又大なる教訓のあることを知る。即ち希望あるが故に如何なる患難にも耐へ、如何なる努力も敢て之を爲すので練達が出来るのである。人生練達なくしては―他語を以ていふならば人生充分なる實驗を積むた人でないならば―事はなせないのである。世に立つて達人となつて事をするごいふ希望があるならば、如何なる事に對しても易々として之を片付けることが出来得るのである。尙ほ希伯來書の記者は六章の十九節に於て

「我儕が此望は靈魂の錨の如し堅固して動かず」云々。

ご提唱して居る。殊に「魂の錨の如し」ご云ふ一齣は眞に味ふべ

き言ではないか。人生は將に大海に浮べる船の如く激浪怒濤の爲に動いて止むごごなく、前後左右から種々様々なる辛苦艱難並び至る時に洵に堪へ切れたものではない。斯る場合に際して一道の希望の光が輝き出づるならば、恰度錨を下した船のやうに泰然自若として居ることが出来る。これは現世に生を享けて居る時の事であるが、更に人生には死ごいふ難關があつて、此の難關は誰れ一人として遁れやうのないものなるごごは明かであるが、尤も人によつて此の關所に色々の差異はあるに相違ない。此の關所を無事に通り越すごごは容易な事ではない。

古來多くの聖賢は此の問題について深く講究されたご見えて、種々服膺するに足る教訓を残されて居る。彼のギリシヤの聖人ソ



クラテスがアゼンスの人民に訴へられて遂に毒杯を仰ぐの死刑を宣告された時の態度は實に立派なものであつたといはれるが、此の時彼は歎き悲しめる門弟子に向つて、我將に死せんこす、死後汝等我を葬むるであらうが、それは唯だ我が遺骸であつて、此の中に存してある靈は何人も之を囚ふることは出来ないといつた。又印度に於ては輪廻説が行はれたのであるが、其の輪廻説といふのも、肉體其ものが種々様々に生れ變つて來るといふよりも寧ろ心靈が轉々して行く事を意味するではあるまいか。孔子も亦、親を祭る時に神在すが如しこもいつて居る。これは靈魂に對する希望をいつたものである。

プラトーンは「靈魂は不滅で不死である。我等の靈魂は實に他

界で存在するであらう」又「靈魂の不滅たることは明々白々である。故に人は最高の徳と知識に達するにあらざれば惡より解放され救はるゝことはない」といつて居る。尙ほガロウエー博士は其昔宗教哲學に於て、「プラトーンは靈魂の性質と其の運命とは多くの懷疑の起る機會を作つたといふ觀察を下して居る。プラトーンの時代に於て眞實であつた事は今日に於ても眞實であるといふことが出来る。……蓋し此の問題について理論上の歸着を見ず、不確定であるといふことは不思議な事ではない。靈魂不滅の教義は理性によつて不合理と見た眞理として受け容れられたものと同じところで、これは信仰の範圍から認めらるべきものである。……最近これに關する議論は大に發達して來た。然し科學は靈魂の不滅説



の可能を否定することは出来ないといふことを示して居る。又人間が死後の生活に入る性質を有することは明かに矛盾なきものは示すことを得ないといふ觀念を有する識者の内にさへも靈魂の不滅を信するの念が著しく強くなりつゝある。……靈魂不滅の思想を歴史的に觀察して見ると、靈魂不滅の觀念は人間の宗教的信仰の組織の中に大なる地歩を有するものであるといふことを疑ふ餘地がない。蓋し死後の生存に關する觀念は諸宗教の發達と共に深大なる意義を以て發達し來つて居る」——といつて居る。

又英國心理學の大家ゼームス・ワルド氏は「死は睡眠が日一日から日へこの進歩ある如くに又生が生へこ進み行く進歩もあり

得らるゝ。……我々は自分で全く記憶に存しないにしても、我々の潛意識の進歩といふものがある。これは眠つて居る間にも進歩があると同じ事である。而して我々は來世に對して新しき覺醒を起して來るのである」——といつて居る。

又最近廿年間の心理學の進歩といふものは殊に著しいものであるが、マイヤーズの死後サー・オリバー・ロツヂ博士は科學者ではあるが、心理學の上から科學的の死後の問題に就て大に研究して居る。此の時に當り彼れの末子レーモンドが今回の戦争で佛蘭西で戦死したのであるが、彼は「レーモンド・オアライフ・アンド・デツス」——といふ著述をなして、死者との靈的交通の可能であることを主張して居る。これは今學者間の問題になつて居るが、



兎も角も今度の戦争で幾百万人の戦死者があつたので、随つて死後の生命について多くの人々が多なる興味を以て研究して居るから、近き将来に於て何等かの発見があることであらうと思はれる。遮莫、吾人は死後の永久生命といふことについては非常なる希望を以て之に對して居る。

約翰傳第十四章の初めに「わが父の家には第宅おほし然らずば我預て爾曹に之を告べきなり我なんぢらの爲に所を備へに往く、もし往きて我なんぢらのために所を備へば又來りて爾曹を我は納くべし我をる所に爾曹をも居しめん」と示されてあるが、宗教的信仰の上から見ると來世は斯くの如くに明かに示され得る。此處に我等の輝ける希望があるのである。靈魂の錨はこゝに

かけられる。其處で我々が此の世に於て其の生を全うせんとするならば、前述の如くに、いつも、眼前に輝ける希望を（來世に）有つて居らなくてはならない。若しも人生に此の希望がないならば、その人生は尙ほ七分を缺いたもので三分しか營まれてないものである。殊に病氣とか危急なるに際しては此の世の中の希望といふものは實に薄弱なるもので何の役にも立たない。かゝる折しも衷心に死後の永生に輝く希望があるならば吾人は晏如として危急なるに鑑み、死に對するここが出来る。斯の如く、吾人は希望に輝ける生涯を送る人の一人も多からんことを切に希望するの餘り此處に一言する次第である。



### 第三章 愛の充實

天地の間に生を享けたるものゝ中多くは人間の愛が之に加はらないならば、其の生をよく保ち且つ之を完うするここが出来得ないやうに思はれる。尤も野生の草木は人の愛がなくとも育つであらうが、田園の植物は之に人の愛が加はらないならばよく育つものではない。人間の愛は田園の植物に對しては日光や雨露のやうなものである。昆虫魚鳥の如きも野生のものは人の愛を要しないが、家畜に至つては高等なものになればなる程人の愛を受けなければ發育するここが出来ない。英國あたりでは一萬圓もするこいふ馬匹に對しては夏は蚊帳の中に入れ冬は毛布を以て之を蔽ふこ

いふやうなことを聞くのであるが、自分も幼少の頃から馬が好きで馬の子を育てた事がある。或時予の母は「お前が馬にする程の親切を親にしたならば殿様から御褒美をいただける」といつた位で、愛馬家の馬に注ぐ愛こいふものは先づこんなものである。この愛によつて子馬は立派な駿馬となり得るのである。

人間は更に夫れ以上の愛を要求する。若しこの愛がないならば人は育たないのみか、却つて悪いものとなつて仕舞ふのである。幼少の時然り少年の時代亦然り、如何に年老ゆることも、愛なくば人は立ち行かないのである。近頃瀕々として新聞の三面を賑はして居る自殺に關する記事が多いのであるが、自殺者の心事に入つて見ると、其處には此の廣い天地の間誰一人として自分を愛して



くれるものがないといふ心理状態から自殺しようといふ氣になる事と思はれる。若しも此の際に己が心事を打ちあけて語る事の出来る愛の人があるといふ事に氣付くならば、十が十迄自殺は思ひ止まれるであらう。

儲、愛を大別するに個人的と團體的の二種類になると思ふ。人類の歴史を見て愛の發達の徑路を辿るならば其の初めは愛の個人的發達であるやうである。舊約聖書を披いて見ても、神の愛の發達の路筋も亦個人的である。モーセ、サムエル、イザヤ、エレミヤ、アモス、ホゼアといふやうな大預言者大宗教育家も各、神の特寵を受けて成長發達したやうである。新約聖書の記す所を見ても、キリストによつて現はされた愛も亦等しく個人的改善であつて、改

悔も一個一個である。時には雲霞の如き團體の前に立つて大説教をやつて一時に幾千人といふ改悔者の起つたところもあるが、然しながらいよゝ之を育て上げるといふ事になるに、一人一個を手にかけて養ふでないならば育つて行かないのである。それで愛は先づ個人から始まるといふことが出来ようと思ふ。

哥羅西書第三章十四節に「愛は衆徳の帶なり」といつて居る。改正譯によるに「愛は衆徳を完うする帶」であるとなつて居る。孰れにしても世の中に笑顔よしは七難を隠すといふ諺があるが、其人に愛があり親切がありさへするならば徳操に缺ける所があつても其の缺點を補ひ得て餘りあるのである。其處で問題は如何にすれば愛の充實を完うすることが出来るかといふことである。



愛の充實を計るためには色々な方法があることと思ふが、第一番に最良の方法といふべきは眞に愛なる人を見出して之を手本にして學ぶことである。人の家を訪問しても、其の家の取り次の者が男女に不拘、親切で温か味があるならば、畧々其の家の主人公なり夫人なり、愛の人であるといふことが察せらるゝことである。之に反したる時は其の主人なり妻君の心事も大抵、反対な現象を見ることが多い。又親が温かい愛の人であるならば其の子女達は自然に其の感化を受けて、愛の人となるのである。其處で愛の人を手本としようとするならば、何處にか其人を見出さなければならぬ。所が不幸にも予輩は之を我國內に見出すことが出来ない。更に之を今海外に求むるも現に活きたる人々の中に其の模範を見

出すことは容易でない。唯だ古人の中に之を見ること出来る即ち基督教の開祖たるナザレのイエス・キリスト其人に於て之を見るのみである。

イエス・キリストはこの點から見ても圓滿なる愛の化身である。其の生涯の記録は實に愛の化身たる人の生涯を描寫したものである。予輩は此のキリストの裏に充實した神の愛に觸れることによつて、如何に頑固な不親切者であらうとも、其の性質の上に一大變動否な一大革命を來すことになる。恰も冷たい冬の時が過ぎて一陽來復の春と變つて來るやうな趣がある。之れが基督教が世界人類の上に寄與する所の偉大なる貢獻の一である。

イエスの生涯をかき綴つた新約聖書の最初の四卷である四福音



書は、實にイエスの尊い愛の生涯を描いたものであるが、同じく新約聖書中のコリント前書十三章を見るに、これは實に人類が謳つた絶大なる愛の詩篇である。予輩は常に之を愛誦して殆ど之を暗んじて居る位であるが、英國のドラモン博士は之を基として「世界最大のもの」といふ愛の説教を遺して居る。此の十三章の内容を今少しく紹介して見るならば

「假令われ諸の人の言および天使の言を語ることも若し愛なくば鳴る銅や響く鉞の如し。假令われ預言するの能あり又すべての奥義と諸の學術に達し又山を移すほごなる諸の信仰ありと雖、若し愛なくば數るに足ぬものなり。假令われ我すべての所有を施し又焚るゝために我が身を與ふることも若し愛なくば我に益な

し。愛は寛忍をなし又人の益を圖るなり。愛は妒まず誇らず驕傲せず非禮を行はず、己の利を求めず輕々しく怒らず人の惡を念はず、不義を喜ばず眞理を喜び、凡そ事包容おほよそ事信じ凡そ事望み凡そ事忍ぶなり。愛は永久も墮ることなし………それ信仰と望と愛と此の三つのものは常に在なり此のうち最も大なる者は愛なり」

と謳つて居る。こは實に人間の言として驚くべき言ではないか。尙ほ此の愛について女性化される虞れがあるといふやうに誤解して居る人が少からずあるやうである。けれども基督教の愛は正義を離れては有り得ないのであるから、それは全く杞人の憂といふべきである。正義を抜きにした愛といふものは非倫の愛である。



吾人はかゝる愛を指して基督教の愛といふのではない。人道は愛の發現であるが、呼んで正義人道といふ所以のものは愛の女性化を恐るゝが故である。愛と正義、人道と正義とは相俟つて基督教の愛の徳を完うするものである。

話が少しく枝道に折れるやうであるが、十九世紀の中葉に至つて世界の交通は日進月歩の勢で發達したのである。其の結果として世界萬國は孰れも近隣の感じがするやうになつた。其處で一國を愛した愛は擴張せられて全世界を愛するの愛と變り、一民族を愛した愛は全人類を愛するの愛となつて發展し來つたのである。即ち吾人の愛を施すべき世界は擴張されたのである。一人一個を相手にして居ては埒があかないといふ所から、一面には世界教化

の聲が高くなつて歐米到る所に傳道機關が設けられて内地といはず外國といはず、大仕掛の傳道が開始せられるやうになつた。又他方ではウヰリアム・ブラスがロンドンの闇黒世界を探究した結果、遂に助けなき世の人々を救濟せんこの目的を以て、救世軍を興したが、夫れも半世紀を経ざるに今日では殆ど全世界に其事業が及んで居る。更にシヨルジ・ウヰリアムスなるロンドンの紳商は、青年救濟の目的を以て青年會を起したが、これも今や全世界の事業となり、今回の大戦争に際しては青年會萬國總幹事モット氏の如きは貳億參百萬弗を募集して此の事業を進展せしめようとして居る。又クラーク博士は共勵會を起して教會の幼少年者のために、自己修養に兼て他人救濟に努力せしむるために力を盡して居る。



る。この事業も今日では世界的事業となつて居る。尙ほ此他に監獄改良孤兒救濟曰く何曰く何ぞ慈善救濟の事業は枚擧に違ないが、孰れもこれが愛を基礎とする事業であることを思へば實に愛の事業も亦大なる哉といはなければならぬ。尤も基督教でも佛敎でも過去の時代に於て愛の發動を見たのであるが、これは一少局部に限られて居た。前述の十九世紀の中葉に其の萌芽をきざして停止する所を知らない大なる愛の發動には如かないのである。我日本に於ても今回の戦争によつて多くの金満家が簇出したのであるが、これが次第に其の財寶を擲つて慈善博愛の事業のために醸出しつゝあることは洵に喜びにたへない所である。尙ほ益々かゝる美風が習慣となつて我が社會救濟のために多くの出資者の

起らん事を希ふ次第である。

終に一言して置きたい事は個人的の愛はよく行き届く性質を備へ、見ゆる所より見えざる所まで徹底するが、團體的の愛は餘りに其の範圍が廣いために、深く徹底する所まで行かない憂がある。其處で吾人が愛の充實を計らんとするならば、一面個人的の愛を、溢るゝばかりに行ひ、而して之を博く及ぼすといふ事にしなければならぬと思ふ。茲に於てか吾等の愛は其の個人的方面と團體的方面の完成を見るここが出来るのである。



### 第四章 最高の模範

前述の如く人類は勿論鳥獸に至るまで好模範を見て常に成長發育するやうである。家庭にては子女は父母兄弟姉を模範とし、學校にては學童は教師や上級生を模範とし、又社會にては先輩に見習ふのが常である。基督教は言葉の教でなくして生命の教である。生命の教とは生命ある者が他の生命ある者に善感化を與ふる意である。今日基督教が世界の表に勢力ある所以のものは斯教が言葉の教でなくして實行の教であり、生命の教であるからである。イエスも馬太傳の十一章の二十七節に「重きを負へる者勞れたる者は我に來れ我爾曹を息ません爾曹我に學べ」と教へられたことであ

る。基督教を天下に宣傳する上に於て最も力を致し、殊に宗教的教育の實驗に富めりこの稱あるパウロは矢張模範を高調して哥林多前書八章の十三節に「是故に食物己が兄弟を礙かさば我は兄弟を礙かせざる爲に永久までも肉を食はじ」と録して居る。予輩は基督教者として可なり長い歳月を経過したここであるが我が修養上最も有力であつたのは先輩の名論卓説ではなくして活る人格の活きた手本であつたのである。實に基督教では生命が生命を生み、模範が模範を生む譯で、之れがキリスト以來今日に至るまで傳はつたのである。假りに今是れを燒棄し去るも基督教は消し去るものではない、それは基督教は基督教者の節々骨々まで徹底してあるからである。そんな事で消滅するやうな教ならば今日世界の表に偉



大なる感化を止むる事は出来なかつたであらう。

實に模範てふ一事は人類教育の眞髓である。見られよ習字一つ習ふにしても好手本を撰ぶではないか、繪畫を習ふにも良師が必要である。鶯を育て、美音を發させようとするればこれ亦良き鶯の發音を聞かしむるに云ふことである。パウロは腓立比書三章の八節に「キリスト・イエスを識るを以て最も益れる事とするが故に凡てのものを損なす我かれの爲に既に此等の凡てのものを損せしかご之を糞土の如く思へり」と喝破された。其意義は云ふまでもなくイエス・キリストに於て最好模範を發見したので從來貴重したものは皆悉く委棄するも惜からじこの叫である。

今より五六十年前に英國のザヨン・スチユアルト・ミル云ふ

學者は「宗教三論」と云ふ書を著し、基督教を味噌粕のやうに罵倒したがキリストに對しては尊敬の念を失はなかつたこと見えて三論の末章に於てかく録して居る、曰く「基督教は何一つ世界に貢獻する所がなかつたとしてもキリスト云ふ立派な性格を示した事は多しすべきである、吾人が行動をなす場合にキリストが見て褒め給ふや否やを考へ、而してキリストの褒賞に値するやうな事をなすことであれば世界に於て之に勝る道徳はない」と、佛のボルテールやルーソーの如きも口を極めて斯教を罵倒したがキリストの人格に對しては兜を抜がざるを得なかつたことである。

茲に考ふべき一事は模範が餘り高遠に進めば到底及び難しことして學ばうごしない、これ或は水至つて清ければ魚住ますの類であ



らう。然るに予輩の最高模範たるイエス・キリストにはかゝる非難がないやうである。釋尊は王族然かも皇太子であつた、孔夫子は名門の家に生を享けた貴公子の一人であつたが、イエスのみは純然たる平民にしてナザレ邑の木匠ヨセフの子であつた、これ則ち世界萬民の龜鑑とすべき大人格である。尙ほそのイエスは學者でもなく祭司でもない、獨立自營の叩き大工であつたので予輩はそこに龜鑑とすべきものがあると思ふことである。若しも王侯であり貴人であつたなれば其以下の者は共に伍することも叶はない、又祭司とか學者とか云ふ者であれば無學卑賤の輩は迎ても及ばないとして接近しないことであらうが、イエスは前述の如く一平民なれば衆萬人の友である。尤も當時の王侯貴人はイエスがナザレ邑

の木匠たるの故を以て推尊するここが出来なかつたやうであるが、イエス逝き給ふと間もなく上は王族より下萬民に至るまで彼の前に拜跪するやうになつたことを見れば確に衆萬人の模範たるに相應しき資格を備へて居られたに相違はないことである。予輩は幾回東海道を廻つても列車の窓から富士の高根を仰ぎ見ることである。何が故に仰ぎ見るか云へば高く實際に聳えてあるばかりでなくその白雪を戴いてある高潔さが予輩を引着することである、ナザレのイエスが木匠であり平民であり孜々營々として職業を勵まれたこと云ふことであれば何にも妙味はないことであるが、その多忙な生涯の中に自修鍛鍊して主仁主聖否な神子と仰がるゝやうな人格ごなられた所に非常な引着力が存することである



る。實にイエスは宇宙の大靈と同化した大人格にして彼の衷に充  
 盈したものはまさしく神の靈であつたので、高いとも深いとも言  
 ひやうがない、イエスの清話は馬太傳の五章六章七章に蒐集して  
 あるが、予輩は幾回之を讀んでも倦むことを知らない、讀めば讀む  
 ほど奥妙なる意義が生じ來るので今尙ほ之を讀むことを無上の樂  
 として居る。又イエスの人格は之を仰げば仰ぐほど高まりゆく  
 之を模範として且つ慕ひ且つ仰いで居ることである。

いづれの方面より見るもイエスは吾人の理想であり模範である  
 ことは何人も異論のない所であらうが予輩は特に前三章に叙述し  
 たる信、望、愛の三者に就てイエスに負ふ點が多いことである。實  
 に彼は生れ落るや最も信念の深いマリヤの手に育てられ給ふたの

で幼少の頃から信仰の念に極めて旺盛であつたやうである。齡十  
 二歳の時その父母に連れられてエルサレムの宮に詣るや歸途彼の  
 姿が見えないので、兩親は都に引返し、所々尋ね索せしも見當ら  
 ず、最後に宮に往いて見れば何ぞ圖らん兒は當時の碩僧鴻學に圍  
 繞され盛んに問答をやつて居るので母は「子よ何ぞ我儕にかく行  
 たるや父と我と憂て爾を尋ねたり」と云ふや、兒は直ちに答て「何  
 故我を尋るや我は我父の家に在るを知ざる乎」と云ひ、此時分  
 天父と偕に在り且つ燃るばかりの信念は時を驅つて此問答を敢て  
 せしめ、己が家に歸らしむるを忘れしめたことである。其後十有八  
 年の間は所謂沈黙の時期で何をして過されたか史乘徴すべきもの  
 がないので分らないが、幼にして父ヨセフの死に遭ひ一家の責任



を負ふて木匠の業に全力を注がれたものを見るの外はない。三十にしてかのバプテスマのヨハネがヨルダン河邊に幾千の人々を引着し獅子吼をなすこの報知を耳にするや恰かも疾風の如く馳参じ其警戒に接して大に共鳴する所あり、退いて四十日四十夜淋しきユダヤの野に入り、深く念ひ深く禱り、終に意を決して立ち給ひ、爾後三年間獅子奮迅の勢を以て東奔西馳、此間幾回もユダヤ人等の論難攻撃に遭ひ、數、危地に陥られしも命を天に委して毫も懼るゝ所なく、福音を宣傳しつゝ門弟子を訓陶誘掖し、終に十字架上に磔殺され給ふたことである。此三年間に渉れるイエスの生涯は活る天父の命のまゝに動くてふ信念の發動に外ならなかつたことである。

ガリラヤ傳道中イエスは大障礙に遭ひ一時ツロ、シドンの方面に避難されたこともあり、此間殆んど希望の光を見る事は出来なかつたが、彼の心中には望なきに望むてふ希望が充實してあつたものと見え、再びガリラヤに入り更にユダヤに轉じ、茲に神國の礎石を据ゑられたことである、然れ共學者バリサイ人等の反對は一日と猛烈を加へ來り、いよく彼をなきものにせんこの隠謀成れりご知るや、イエスは門弟子に對して「爾等憂ふる勿れ懼るゝ勿れ我が父の家に第宅多し然らざれば我預て爾曹に之を告ぐべきなり我爾曹の爲に所を備に往くもし往て爾曹の爲に所を備は又來りて爾曹を我に納へし我をる所に爾曹をも居しめんこて也」(約翰傳十四章一節より三節まで)と云ふ死後に於ける希望を説き示し、



悠悠々々迫らざるの態度を以て此世に於ける使命を遂行し、終に十字架上に磔殺の刑を甘受されたことである。實に生あるものは死なき能はず、いつ何時死の使は我門を叩くやも測られないので、死に對する覺悟は一日たりとも怠つてはならない、予輩は死の覺悟よりも天上生活を樂む希望に満たさんごあるので死を睹る歸るが如くである、随つて死に就ては何等憂ふる所はない。

使徒パウロは哥林多前書十三章に愛の詩を頌し、最後に「夫れ信仰と望と愛と此三者は常にあるなり其中最も大なるものは愛なり」と結ばれたことである。これはいかに愛の人生に必要なかを高調された譯であつて、第三章にも述べたやうに愛なくしては此世は荒涼寂寞な野原を渡るやうなもので、何の悦も何の樂もあつ

たものではない。愛なるかな愛なるかな、愛は凡ての凡てである、さればにや約翰第一書の記者は「愛なき者は神を識らず神は即愛なれば也」(約翰第一書四章の八節)と録して居る。吾人は愛の權化とも云ふべきイエスを通して愛の神なる天父に接觸して茲に温められ潔められて曩日の冷やか厭な冬の日のやうな生涯は變じて温暖な春の日のやうな生涯に遷りゆくことを覺ゆるものである。若し夫イエス・キリストの降世なかりせば釋迦の慈悲孔子の仁あるも世は尙ほ荒涼たるを免れなかつたであらう、否身を殺して仁をなせしイエスありと雖這回の歐洲戰の如き野蠻も非文明も云ひやうのない慘事を演出するのを見れば吾人苟くも愛の道に志す者は正義人道團を興して宗祖の志を成すべきではなからうか。歐



米の基督者は戦後の世界に對していかに盡すであらうか。只其奮勵の一日も速かならんことを待つの外はない。予輩基督者は範をイエス・キリストに取り進んで信望愛の三徳を發揮せんことを欲する。覺悟が最も大切である、否な全世界の億兆が皆此最高人格を模範とせんことを望むことである。

大正七年十二月二十九日印刷  
大正八年一月一日發行



發行所

著者	宮川經輝
發者行	東京市京橋區尾張町二丁目十五番地 福永文之助
印刷者	福澤市本町五丁目八十七番地 村岡平吉
印刷所	福澤市山下町百〇四番地 福音印刷合資會社

東京市京橋區尾張町二丁目十五番地

警 醒 社 書 店

(電話新橋一五八三) 振替東京五五三



3F87



終